

対談

## ケア、利他、あそびを考える

Name

近内 悠太(教育者・哲学研究者、知窓学舎講師) × 河村 彩(「未来の人類研究センター」)



## 『ケアの哲学』『世界は贈与でできている』

**司会:** 皆さん、今日はお集まりいただきありがとうございます。隣町珈琲で行われている近内悠太の「ケアと利他、ときどきアナキズム」という連続講座になります。第9回の今日は東京工業大学の河村彩さんに特別ゲストとしてお越しいただくことができました。近内さんとお二人でじっくり話し合いをしていただけたら、と思っております。

**近内:** ちなみに今日、なぜ僕ら二人がしゃべるかというと、東工大の「未来の人類研究センター」から年一回発行されるオンラインジャーナル『コモンズ』の第1号に、僕が論文「はじめに道徳を身に付け、そして、倫理を生きる」を寄稿させてもらったことがきっかけです。

じゃあ早速、中身にいきましょうか。河村さんはもともとご専門が利他とかケアとか哲学とか心理学とかではなく、ロシア・ソビエトの美術研究なんですよ。そこに利他とかケアのエッセンスや、「匂い」みたいなものを感じたりとかはないですか？

**河村:** 残念ながら全然ないんです。大学の人事異動で未来の人類研究センターというところに配属されて、そこで

は利他について何か研究をしている。「どうしよう、困ったな。私の研究と全然関係ないじゃん」と途方に暮れていたところにボリス・グロイスの『ケアの哲学』（人文書院、2023）という本が英語で出たんです。グロイスという人は旧ソ連出身の美術批評家で、ソビエト・ロシア、東欧の芸術家の研究もしていて、東側の視点から西側の美術の制度を批判的に見るような美術理論を書いてきた人です。私はグロイスの前作の『流れの中で インターネット時代のアート』（人文書院、2021）という美術批評集をすでに翻訳していて、「『ケアの哲学』を翻訳したら利他に関係があるからいいんじゃないか」ということから利他研究を始めました。

**近内：**「西側」というのはキーワードとして確かにあるなと思いました。グロイスが西側のそういうものを批判しているときに、まさに利他とかケアって、いわゆる西側的じゃないところにある気がするんですね。「利他」や「ケア」は、確固たる私——「これは私の所有物、これはあなたの所有物」というような、所有“property, possession”の概念の中からはあまり出てこなくて、「たまたま私のとこに来ちゃったから、よかったらこれあげる。僕はそんなにいないけど、あなたはどうしてもこれが必要そうだから」という発想なんじゃないでしょうか。まさに「コモンズ」って、「私の」とか、みんながそれぞれの持ち分を取り出したとか、持ち寄って集めたというよりは、「ここにみんなの共有財があって、どこまでが私有財っていうのがないよね」というものでしょう。西側ならざるものにいよいよ光が当たらないといけなような時代な気がするんですね。

じゃないと格差も広がるし、そもそも生きている心地というか「生命としての実感」がないんじゃないかと。まさにこの本で僕が感じたのは、グロイスが主に論じているのは「生存」というものに関するケア。生存を管理している社会や共同体に対する批判は、たとえば、思想家のミシェル・フーコー（1926-1984）がいたりしますよね。つまり、身体としては生きている、物が食べられるし、建物もあるし、薬もそれなりに安価で一応手に入る。今、生存は確保されつつあるわけじゃないですか。けれども、問題は「生きている」という実感や心地というものがどこからやってくるのか。それが、僕が「贈与」について言い出したいちばんの根っこだった気がするんです。

生きていく中で、ほかならぬこの私に宛てて何か送り物が届いたとき、つまり簡単に言えば愛を感じる時、その時の「あの感覚は何なんだろう」、「ここにどんなメカニズムがあるんだろう」というのが僕の思いとしてあった。「なぜ贈与なんて論じたんですか」と言われたときに、「生きている心地って、こういうところにあるんじゃないですか？」という問いかけをしたかった。それがたぶん僕が贈与を論じたきっかけかな。

**河村：**近内さんの本『世界は贈与でできている』（NewsPicks パブリッシング、2020）は、いろいろな事象や事例に触れながら「贈与」というものを見せてくれますよね。贈与というのはすごくわかりにくいもので、お金で交換されるものだったら、売買したときに「今交換が生じた」とわかるけど、贈与はそれがなかなか見えてこない。そんな事例を、近内さんはこの本の中で具体的にわかりやすく示してくれたと思いました。

ところで、近内さんは今まで生きてきた中でいろいろな事象に触れて、あるいは人と出会って贈与というテーマを思いついたのでしょうか。それとも「あ、贈与」とひらめいて、贈与が頭の中にあるといろいろな事象が贈与として見えてくるのでしょうか。もちろん両方あると思うんですけど、その辺りのことを知りたいです。

**近内：**たぶん、僕が贈与という言葉を知ったのは、フランス文学者で思想家の内田樹さん（1950-）のエッセイや論考中の言葉です。「大人になるとはどういうことか、贈与する人になることだ」というフレーズを、本当にそうだなと思った。そこからはちゃんと文献を読まずに勝手に自分で考え出すという僕の悪い癖を発揮して、普通だったらマルセル・モース（社会学者、文化人類学者、1872-1950）も読んでクロード・レヴィ＝ストロース

(社会人類学者、民俗学者、1908-2009) も読んでとかなるんですけど——もちろん、モースは読んだし、レヴィ＝ストロースも横目ではちょっと見たんですけど——俺の思ったのはここじゃない、と思って勝手に考え出した結果、いろんな事例を絡ませた不思議な書物になりました。

受け取ったものがなぜ私のところに来たかという、たぶんそれより前に流れてきていたものがあったからだと思います。たとえば、部活の先輩後輩はちょっとした親子関係のミニチュア版だと思うんですよね。たとえば、いい部活——しごきがあるような厳しい世界じゃなくて、ある意味贈与的なコミュニティのサークルとか——だと、1年生が最初は面倒を見てもらう側、教えてもらう側で、「なぜこの先輩たちは僕らにこんなにしてくれるんだろうな」と思う。そこで2年生、3年生、あるいは大学生になると、今度は下の世代を教えるようになる。自分が上の学年になったとき、「ああ、次の世代に教えてあげられるのは、あのときもらったからなんだな」と思うわけです。ここは与える側の視点なので「贈与」ではなく、今の僕の考えだと「ケア」と言いたいんですけどね。先輩後輩関係はケアの連鎖としての「ケアの風景」だと。贈与に関しては、人間ってそうやって繋がっているんじゃないかなという実感がありました。贈与というものを通すといろんなものが見えてくるので、一冊書かなきゃなと思いました。

あとはやっぱり、3.11 が大きいんですよ。SF 作家の小松左京（1931-2011）の話を出したんですけど、あれはパンデミックではなくて僕の中では3.11 なんです。文明の崩壊、文明の壊れやすさ——壊れやすさというか、文明の停止。文明が停止するだけで、僕らはこんなにも困ったり怯えたりするのか、「え、ホモサピエンスという種って相当弱々しい種だったんだ」ということに気づいたときに、これをみんなの共通認識にしないとこの社会はもたないんじゃないかなと思いました。税金払ってるんだから早くインフラを動かせとか言っても、その行政の人たちも被災していたり、あるいはその人たちも文明の停止によって困っているわけですよ。

よく思うのが、地震が来たときにエレベーターの中に閉じ込められてボタンを押して「助けてくれ」って言っても、各地でエレベーターが止まっていたら助けてもらえないんじゃないの、ということです。ある意味、われわれはいつもそういう乗り物に乗っているわけですよ。今は平常運転しているからいいけど、これが止まったら誰が助けてくれるんだろう。「ヒーローはどこにいるの?」という、「ヒーローは僕たち自身になるしかない」という感覚。つまり、自分たちがこの社会を回している当事者である、という感覚がないと危ういと思ったんです。当たり前前に存在しているのではなくて、ちゃんと作る人がいたり、保守点検して今日も滞りなく動くようにメンテナンスし続けている人がいるという認識がないと社会が成り立たないと思ったというのが、贈与の根っこの問題意識としてあります。大事なのは常日頃から受け取っているという感覚です。

**河村:**私もその小松左京のSFの話はすごく面白く読みましたが、単純にこれは新型コロナウイルスのことだと思ってしまいました。ちなみに、近内さんの『世界は贈与でできている』は、コロナの前に出版されたんですけど？

**近内:**2020年の3月なので新型コロナウイルスの流行直前です。ゲラを直している1、2月に「日本でもコロナ患者が出ました」とニュースがあって、出版と同時に世の中はコロナ禍に突入というタイミングでしたね。出版に関連したいろいろなイベントが軒並み中止になりました。

## 時間の贈与、ケアと利他

**河村:**近内さんが取り上げている小松左京の『復活の日』（早川書房、1964）のテーマも「感染症」で、ウイルス

がまん延して、病気で倒れている人が道にいても、それを救助する人もいない。亡くなっても火葬にする人がいないのでお葬式が出せないという、普段だったらケアする側の人が倒れてしまって機能不全になるという話です。これはまさに、コロナ初期にアメリカやイタリア、イギリス等の国々で起こったことですよね。私はそれに重ね合わせながら読んでしまったんですけど、近内さんは、コロナの前と後とでこの小説の読み方が変わったり、真に迫ってきたという経験はありましたか？

**近内：**僕個人の感覚としてはあまり変わらないんですけど、世の中の流れが変わったなとは感じます。オンラインでいろんなことができて、住んでいる場所に関係なく誰かとつながることもできるようになったからこそ、逆に対面で会うことの価値みたいなものがよりはっきりわかったと思います。

東畑開人さん（臨床心理学者、1983-）が松本卓也さん（精神病理学者、1983 -）との対談の中でおっしゃっているんですけど、東畑さんは心理療法師としてカウンセリングをする際に、「オンラインだと限界がある」と言うんです。なぜかという「安全だからだめなんだ」って言うんです（「ケアが『閉じる』時代の精神医療 心と身体の「あいだ」を考える」『コロナ禍をどう読むか』亜紀書房、2021）。目の前にいるということは、お互い暴言を吐かれるリスクも、あるいは暴力を振るわれるリスクもあるわけですよね。にもかかわらず、相手が「この先生は暴言を言わない」と思うところに、おそらく信頼というか安心みたいなものがあって、対面だと運命共同体になるわけです。

やはり時間を共にしているということがとても大切だし、僕は時間を共にすることが贈与のいちばん簡単なやり方だと思っています。一緒にご飯を食べたり、一緒に飲んだり、一緒に喋ったりするのって、お互い時間を贈与し合っているわけですよね。経済学で「機会費用」という言い方があって、結局今これをしているんだけど、今これをせずにほかのことをしていたら得られた金銭というものがあります。ほかのことをしていたら得られたであろうものを犠牲にして、今一緒にこの時間を過ごしている。ある意味、お互い機会費用を贈与し合っているわけです。しかも、そこにあまり有用性や目的がないほうが、一緒に時間を過ごす意味が増すと思うんです。ある明確な目的のために集まるのではなく、無目的に集まるというのが、まさに「あそび」というキーワードなのかなと思っています。一緒にいると、実は時間を贈与し合えているというのは大事な認識のような気がしました。オンラインが普通になると、逆に明確な理由抜きで「やっぱり一緒にいるって大事だね」というのをみんなが感じるようになったんじゃないかという気がしました。

**河村：**それは「ケアの大切さ」なんじゃないかなと思うんですよね。つまり、私がずっと考えていたのは「ケアと利他の違いってなんだろう」ということなんです。「ケア」は医療福祉的な文脈で使われると思うんですけど、東畑さんのカウンセリングはまさに「ケア」ですよね。こういったカウンセリング的なものは目の前に人がいて身体がないとわからない。「ケア」というのは「身体」「時間」「場」を共有していると定義するとすれば、「利他」と「贈与」というのは、別にタイムラグがあってもいいわけですよね。送り手が過去にいて時間が経ったあとに受け手がそれを受けることが可能だという。それが「ケア」と「利他」、あるいは「ケア」と「贈与」の違いなんじゃないかということをおもいました。

**近内：**たしかに。ケアにはなんというか即効性が必要になると。今・ここつまり目の前に傷を負った人、いままさに傷つきそうになっている人がいる、支援が必要な人がいる、その状況や場に応答しなければならないという切迫感があるように思います。なるほど、贈与や利他は「あとから効いてくる」。でもケアには「あとから」という面

はやはり弱いですね。リアルタイム／タイムラグという点ではありますが、僕はやはり「利他」と「ケア」は繋がっている概念だと思っています。『居るのはつらいよ ケアとセラピーについての覚書』（医学書院、2019）の中で東畑さんは「ケア」について「雪だるま」のアナロジーを語っています。雨に濡れて溶けてしまう雪だるまのケアをするのは、雪だるまを冷やしてあげたり、冷気を送り続けてあげたり、雨除けを作ってあげたりすることだ、と。つまりその時々ニーズに合わせて相手を傷つけないこと、相手に変わることを強制しないことがケアです。

それに対して、「君、そこにいると溶けちゃうのわかってるでしょ？あっちに業務用の冷蔵庫があるんだから。なんであっちに行かないの？なんで君は自分の環境を変えようとしないの？」というふうに介入するのがセラピーだという言い方をしています。まさに「傷つけないこと」がケアならば、僕は何かとても大切なものがここにあるなと思っています。

僕の「ケア」と「利他」の定義をちょっと言わせてもらおうと、「ケア」の定義は「その他者が大切にしているものを共に大切にすること」。この定義だと医療や介護もいろいろなものを含まれるんです。「身体」ってある意味共通にみんなが大切にしているもので、痛みや治療というのはみんな怖い。だから他者の身体、つまりその人が大切にしているものを一緒に大切にするのがケアなんです。

「利他」というのは、他者が大切にしているものを一緒に大切にしようとして、自分のルールを破るような何かをしなきゃいけなくなるときに、自分よりも他者が大切にしているものを優先する行為だと思っています。「ケア」の中に、あるエッセンス——自分が大切にしているものよりもその人が大切にしているものを優先するというファクター——が入ると、おそらく「利他」に切り替わるんじゃないかなと思っています。利他とケアを「大切にしているもの」というキーワードで考えています。

**河村：**今のケアの話聞いて思い出したのが神谷美恵子の『ケアへのまなざし』（みすず書房、2013）の中のエピソードです。神谷さんはハンセン病患者の療養所に精神科医として定期的に通っていましたが、自分の患者さんの中でとてもすばらしい詩を書く人がいたそうなんです。その人と神谷さんは詩人とそのファンとして交流していました。ある暑い日に、その患者さんが戸口の前で倒れていたそうなんです。ハンセン病だと汗が出なくなって、暑くなるとそういうことがあるらしいんです。神谷さんが通りかかったときに、倒れている詩人は「みっともないところを見られた」というようなすごくきまり悪そうな顔をしたそうなんです。苦しいけれど死ぬほどの症状ではないということを知っていた神谷さんは、その表情を見て「失礼しました」と言って立ち去るんです。お医者さんなのに治療しないんです。

「治療しなきゃ」という自分の職務よりも、患者さんの尊厳を尊重することをとっさの判断で優先したのはすごいことだと思います。私は「これは究極の利他」だと思っていたのですが、相手を変えずに相手の大切にしているものを共に大切にするという、近内さんの定義する「ケア」に該当するのかなとも思いました。

**近内：**いやいや僕も、それは「利他」だな、と思いました。自分の職務というやるべきことがあるにもかかわらず、優先順位を自分の中で切り替えたわけですよね。自分の役職という、自分が従わなければいけない規範——治療するべきとか、患者に寄り添うべきとか、助けるべきとか——があるわけですがけれども、その優先順位を「他者の大切にしているもの」にとっさに替えてしまったわけですよね。

たぶんお医者さんとしてはその後に「やっぱりあのとき助けるべきだったのかな」とか、「医者としてどうだったのかな」とか、「放置しちゃったな」という葛藤があったと思うんですよね。自分はやるべきことをやったんだって胸を張ると同時に、「やるべきことをやったと思うんだけど、あれでよかったのかな」というためらいが出てくる。

それがまさに利他の特徴だと思うんですね。

自分が大切にしているもの、あるいは自分がやるべきだと思っていたものと、今この人が求めているものが矛盾する、両立できないというときにどちらを取るべきかという葛藤があるというのが利他だと思います。「咄嗟の判断だけど、よかったのかな、あれで」というような思いがあるとすると、ケアという成分もちろん入っているんだけど、葛藤があって優先順位が切り替わる。ここにある構造を一般化すると、キーワードは「システム」です。僕らはふだん行為するとき、何らかのシステムの一部として行為しています。いまの例だと医師 - 患者という役割のシステムがあります。さらに、たとえば社会人としてのふるまいとか、母親としてまっとうすべき行為とか、あるいは「自分らしい」発言とか、そういった認識の体系（＝常識）も含めて。僕らは自由にふるまっているように見えて、何らかの広義のシステムの中を生きています。ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン（1889-1951）的に言えば、僕らは何らかの言語ゲームのプレーヤーとして、順守すべきルール（規範性）を課せられている。でも、他者との邂逅から、思いがけずケアしてしまう。自らが引き受けているシステムを逸脱してしまう。その意味で、ケアをしようとして、システムを超えてしまうことがある。つまり、利他はケアの中から起こる「バグ」なんじゃないかと考えています。

**河村：**なるほど、だとすると神谷美恵子のケースは「利他」かもしれませんね。そのあとの葛藤はエッセイに書いてなかったのがちょっと残念なところなんですけど。

**近内：**利他とケアというのは、僕にとってはやっぱりケアが基本というか基体なんです。その人が大切にしているものを一緒に大切にするというのは、ある意味誰でもやろうと思えばできることですから。今出てきた「恥」とか「尊厳」、「罪悪感」というのは僕らの特殊な心の働きだと思うんですね。恥をかかせないように見なかったことにするとか、あるいは見てしまったことを「こっちが悪いんだ」と言って謝罪するというのは、とても人間的な振る舞いです。

ケアの根っこに何があるかという、僕は「傷」という概念も重要なものだと思っています。自分が大切にしているものが大切にされなかったときに起こるものが「傷」なんだろうと。

たとえば、信田さよ子さん（臨床心理士、1946-）は、たしか「三つの傷」と言っていて、身体の傷、性的な暴力などによる傷、言葉による傷を挙げています。自分の身体は大切ですし、自分の性的なアイデンティティーや性的なものに関するごくプライベートなことはセンシティブで大切なものです。そして言葉による傷を受けること、つまり精神とか魂が傷つくこともあります。どこかに実際の外傷があるわけではなくとも、自分の大切にしているものが誰かの暴力的な手段によって傷つけられるということがあります。

もう一つこの「傷」に関して興味深いのは、誰かによって傷つけられたときだけでなく、誰かを傷つけたときにも僕らはなぜか傷つくんですね。自分の大切な人を大切にできなかったとか。たとえば自分の身内が亡くなったとき、おじいちゃん、おばあちゃんに最後にちゃんと挨拶できなかったとか、あれが会うのが最後なんだったらもっと優しくしてあげればよかったという想いにずっと囚われるんですね。傷つけられているわけでも、自分の大切なものを誰かによって蔑ろにされたわけでもなく、自分が大切にしているものや相手をちゃんと大切にできなかった、ということで僕らは自分を責めるんですね。

それでいうと、贈与と利他、ケアは何がどう違うかという、僕の中では差し出す側か受け取る側かの違いで分けています。「贈与する」というのは僕の中では語義矛盾で、贈与は受け取るものでしかない。「～する」と主体的に言えるのは、僕は「ケア」だけだと思っています。「利他」はその振る舞いが結果的に利他になるとしています。

僕は「利他になる」という言い方を結構しますね。「利他をする」とか「贈与をする」というのは、直観的に受け入れられないんです。

**河村：**私も「利他」と近内さんの「贈与」という概念は主体的に行為することができないという点ですごく近いと思っています。けれども、近内さんの発想の方がラディカルだなと思ったことが一つあります。利他というと、行為者とそれを受け取る側という二人がいて、時間差や偶然があっても、その二人は必ずいることが前提になっている。でも、近内さんは『世界は贈与でできている』の後半でアンサングヒーローという、本人も贈与を行ったかどうか全然わからない事例を出してくる。

**近内：**そうですね。「受け取った記憶」をちゃんと覚えておく、思い出すというのが倫理的だと思います。逆に、「あの時に～してあげたのに」という与える側の思いというのは、ある意味、非倫理的というか、暴力的なことにもなるような気がします。時間順序でいうと、あげた人がいて、その後を受け取る人が現れるんだけど、でもこの時間順序はおかしくて、あげたけど相手がなんとも思わなかったらそれは贈与じゃない。やっぱり「受け取りました」という人が発生した瞬間に過去に遡ってそれが贈与だったことになると思います。贈与にはそういった遡及性があります。

## 贈与の呪い、SF と AI における未知との出会い

**近内：**まさに「未来の人類研究センター」の中島岳志さんも伊藤亜紗さんもおっしゃっているように、利他から最も遠いもの、あるいは利他を阻むものは、他者を支配したりコントロールしたりしようとすることです。僕はそれを本の中では「贈与の呪い」という言葉で語っています。善き行いと思われているもの、「みなさん、利他的なことをしましょう」というのを普及させることが危険なのは、それによって自分が気持ちよくなる、自分の満足感のために他者を利用してしまおうという懸念があるからです。しかもこれは道徳的に「善いこと」とされているから断りづらいし、「受け取れなかった私が悪い」というふうに思って、受け手も呪われていくと思うんですよね。だからそこは深く自制するというか、他者をコントロールしようとするのを抑えないといけないというのはすごく思っていますね。言ってみれば、自身の「執着」に対する対処とも言えます。相手を変えたい、コントロールしたいというのは、相手が次の瞬間、予期せぬことをするかもしれないという不安の裏返しです。僕らは執着も不安もきちんと認識しないまま、「これは相手のためなんだ」と思い込むという自己欺瞞を行ってしまいます。これが利他を阻む。

**河村：**マルセル・モースの『贈与論』は基本的に負債論ですよ。最初に返礼というものがあって、そこから贈与が発生するというような考え方ですけれど、すでに受け取っていると考える近内さんの贈与は真逆なんですよ。

**近内：**僕が本の中であえてはっきりとモースを入れなかったのは、モースが言っているのは贈与交換の社会的・全体的システム、つまり取り決めだからです。贈り物のメカニズムは共通の「信じているもの」があるから成立するものだと思うんですよ。なので、一個人の中から立ち現れる贈与については、僕は、モースは正直あんまり使えないというか、論拠として使用することがちょっと難しいなと思っているんです。その代わりと言ってはなんですが、

モースの贈与論のモチーフは、『世界は贈与でできている』の第一章に、映画「ペイ・フォワード」の分析の中に込めたつもりです。

**河村：**近内説によると、「贈与」に関しては、与える側にはなかなかないけれど、受け取る側にはなれるということになります。でも贈与されたのかどうかは結構わかりにくいですよ。もらった側がプレゼントに気づけなきゃいけないし、送られた手紙は読めなければいけない。贈与に気づくのは、一種のリテラシーみたいなものが必要なんじゃないかなと思ったんですけど、それって学ぶことはできますか。贈与に気づけるようになるトレーニングはありますか。

**近内：**人間ってほんとに脆いなとまた最近改めて思います。たった気温が10度、20度変わるだけで、僕は過ごしやすかったり、あるいは寝苦しかったりしますよね。木星や金星など、日が当たるときと当たらないときで、表面温度がプラス200度からマイナス100度まで変わるような環境があるわけです。でも「今日は湿度が50%だから過ごしやすいね」というほんのちょっとの物理的な差で、僕は生きやすいとか生きにくいとか、暮らしやすい、暮らしにくいが決まるというぐらい、あまりにも脆い存在なわけです。そんなのがいじらしく地球の表面で頑張っているわけです。だから、放っておいたらこんな生き物死んじゃうじゃんという共通認識があれば、全部ありがたいし、横にいるこの人も当然傷つきやすく弱々しい存在で、共に助け合ったりしないといけないんじゃないの、というのは、わりとすぐ論理的に考えつくことだと思います。知的負荷がほとんどない、自明のロジックとして。「災害ユートピア」と言われるものは、「こんな弱い共同体だったんだ。助け合わなきゃいけないね」という思いが出てくることだと思います。小松左京のモチーフはまさにそれを日常化するというか、僕は種としてそういう薄氷を踏むような生き方をしているんだ、ということをエンターテインメントとして伝えているんだと思います。それがSF作家の使命だというのが、たぶん星新一と小松左京の共通した思いだったんじゃないでしょうか。だから文学や物語はとても大切だと思うんですよ。つまり、先の質問の答えとしてはyes。贈与に気付けるためのトレーニングは、想像力の鍛錬にある。それを僕は物語をとおして、科学をとおして気付くことができる。

**河村：**私のすごく好きな小説に、ポーランドのSF作家、スタニスワフ・レム（1921-2006）の『ソラリス』（沼野充義訳、ハヤカワ文庫、2015年）というのがあります。ソ連の映画監督のアンドレイ・タルコフスキー（1932-1986）が映画化していることでも有名です。小説の中では、海のようなもので覆われている惑星ソラリスというものが描かれます。その海は高度な知性を持っていて、人間の脳の中の考えを読み取って像として表すことができる能力を持った惑星なんです。ソラリス研究が盛んに行われ、宇宙ステーションを惑星の近くに作って、いろんな学者がそのステーションに飛んで行ってはソラリスの研究をしている。けれどもソラリスは人間の脳波を読み取って変な現象を起こすので、研究者たちはどんどんおかしくなっていく。ハリーという研究者がステーションに行くと、自分の亡くなったはずの恋人が現れるんですね。これはソラリスの仕業だとわかっているのに、ハリーは息が詰まるような思いを抱いて、地球に連れ帰ろうとしてしまいます。

レムはインタビューの中で自分は未知のものに出会ったときに人間がどう振る舞うかというのを描きたいんだと語っていました。ハリウッドによくあるような「宇宙人との戦い」というのは、人間の地球上での勝ち負けという競争原理を宇宙に拡大しただけのもので、そういうSFは人間の地球的な思考から逃れられていない。自分はそういうSFじゃなくて、ファーストコンタクトが起こったときに人間がどう行動するか、心理や倫理的な問題をどう抱え込むようになるのか、というのを描きたいんだ、ということを行っています。すごく小松左京と近いと思いま

した。

**近内：**レムの素晴らしい問いかけですね。まさに今の話でいうと、最近いろいろな映画や小説、ゲームでAIが人間みたいな知能を持った設定になっているんですけど、それらはAIじゃなくてほぼ人間みたいになっちゃってるんですよ。AIが人間らしい欲求をすでに持っているんです。でも、人間の心なんて相打ちぐはぐで、進化の中で継ぎはぎして作られたものなので、もう一回設計図通りに生き物を作ろうとしたら、こんなわけのわからない脳みそなんて作らないはずなんですよ。でもAIは物語の中では人間に似ちゃうんですよ。つまりまさに今おっしゃった通り、人間の想像力を超えていないんです。

未知のものに遭遇したときに既知のものにしかっていない。お話を聞いて、ソラリスの「わけのわからなさ」はそういうことだったんだと実感しました。悪夢を見ているような物語だなと思ったんですけど、たしかにそういう意図を説明されるととても腑に落ちます。自分から見ると、未知のものは全くの狂気に見えるんですよ。

**河村：**狂気や悪夢に見えるものは自分を知るための手がかりになると思います。さきほどのAIの話で言うと、私はロシア語を教えているので、語学学習に関心があるんですけど、AIに語学をインプットしていくと——たとえば最初に英語を教えて、その次に日本語を教えて、その次にロシア語を教えると——最初に教えた言語の能力が上がっているという話を聞いたことがあります。それが本当だとしたら、もしかしたら人間の語学学習力を解く鍵になるんじゃないかと思っています。人工知能は人間の知能の謎を解くために使うことに価値があるんじゃないか、というのをすごく感じます。

**近内：**とても優れた鏡になるということですよ。やはり他者を知るというのは、同時に自分のことを知るということでもあります。さっきの傷の話じゃないですけど、大切な人を傷つけたことによって自分が傷つくという、他者というのそういう存在だと思うんですよ。逆に言うと、その傷によって自分は一人じゃないということがよくわかるとか、あるいは自分ってこういうふうにしてたんだと目が覚める。まさに今のお話で言うと、やはり他者としてのAIということですよ。

## 自然をケアする、気にかけることとしてのケア

**河村：**果たしてAIは人間にとっての他者になれるのでしょうか。

**近内：**人間の想像力って結構バグるので、たぶんなれると思います。みんなルンバに名前をつけたりするらしいんですけど、初期のルンバは、かつては椅子とテーブルの間に入るとスタックして出てこれなくなったそうです。今もそうなのかな。そうすると「ああごめん、今、助けてあげるね」というふうに助けてあげたくなる。これって、まさに僕らにとっては生き物かどうかは関係ないということですよ。他者として見てしまう、困っているものとして見ることでできてしまうというのは、ある意味バグだけでも、僕らの特殊能力、擬人化する能力でもあります。魂を感じてしまう能力。

それは、利他とケアのポイントにもなる気がするんですよ。たぶん僕らは、環境、山や川に対するケアというのもの、少なくとも日本語の文脈だと許されるというか、違和感がない気がするんですよ。環境保護というちょっと

と仰々しいけれど、「この川、ケアしなきゃダメじゃん」「この山、かわいそう」「この山からの小川の流れとか、崖の斜面とか、それをちゃんと大切にあげなきゃ」という感覚があると思います。自然保護や環境保全は「この山がなりたがっている山の形ってなんだろう」とケアすること、まさにエンパシーです。すると当然地質学のことを知らなきゃいけないし、土の中で何が起きているかも知らなきゃいけないし、まさに他者理解と同型のような気がしています。

**河村：**英語のケア“care”は実はすごく意味が広いですね。“care for”だったら「気にかける」、「care about」は「心配する」、「take care of」は「面倒を見る」。「関心を持つ」とか「好き」という意味もあります。『ケアの哲学』を翻訳していたときは、苦労して日本語の文脈に合うように訳し分けたんですけども、グロイスの言っている「ケア」はまさに「気にかけること」なんです。だから、カタカナの「ケア」のように、福祉とか医療的なニュアンスでは全くなくて、世界における自分の存在を通して世界を気にかける、あるいは自分自身の身体や自分自身の生存を気にすることなんです。「地震が起こって死んじゃうんじゃないだろうか」「明日生きていけるだろうか」「将来病気にならないように食事に気をつけなきゃ」というのを全部含めて「ケア」なんです。

**近内：**たぶん、それで言うと、僕のケアの定義はもう一步踏み込んでいるのかな、という気がします。大切にしているもの、という価値判断がすでにそこに入っているんです。褒めたつもりが、相手の表情がちょっと曇って、間があってから「ありがとう」と言われたりすると「あれ？」って感じる場面とかあるじゃないですか。たぶん、これは褒めたんじゃなくて相手の地雷を踏んでしまったんです。つまりこんなコミュニケーションの場面において何かの齟齬が起こることでその人が本当に大切にしているものがわかんと思うんです。この人が大切にしているものはこれだろうなと思っていても、もしそれがずれていたとしたら、コミュニケーション上の齟齬が発生する。たぶんそれによって気づくことができると思うんです。

あるいは大切にしているものがずれていてもなお、どう一緒に過ごせるかを考えることもできる。「たぶん相手大切にしているものが把握できていないからコミュニケーション不全になっているんだよ」とか、「なんであんな人が怒ったか」というと、たぶんあんな人が大切にしているものを軽んじたんだろうな」と仮説が立てられる。その仮説形成の過程で、大切にしているものの輪郭がだんだん見えてくると思うんです。

**河村：**逆にグロイスの『ケアの哲学』の面白い点は、今近内さんが語ったようなコミュニケーションが全部欠落していることです。「ケア」と「セルフケア」というのが主に語られているんですけど、この本の中で語られる「ケア」というのは、主として国家によって提供される安全とか福祉とか医療です。何らかの利害関係があって、人間を生かしておく労働力として再生産できるから、人間の生き死にを掌握することによって人々を動かすことが「ケア」として語られている。

**近内：**上からのトップダウン的な、まさにさっき言った、生命ではなくて生存という、本当に機械的にただ「生かす」というか、適切に食料を分配するというような意味のトップダウンのケア。

**河村：**それに対して「セルフケア」というのは、人間が自分自身の生存を気にかけること、自分で自分の体を保護することを意味します。けれども、人間は自分自身のことについて知らないから、間違ったセルフケアをすることもある。たとえば、科学的根拠がないのに毎日お酢を飲むと健康にいいと信じて、体を壊すような存在なんだとい

うことをグロイスは言っているんですね。

**近内：**それで言うと利他において重要なのは「自由」ということかなと思います。結局上から強制されるものというの是不自由なわけです。「生きなければならない」「生かされてしまっている」となる。それに対して「自分が生きているんだ」という実感は、自分たちで獲得するしかないものです。

利他や贈与によって相手を支配し、コントロールすることはまさに他者の自由を奪うことです。僕は「呪い」の反対は「祝福」だと思っているので、自由であることは祝福だと思います。それは具体的にはその人の可能性を広げること、選択可能にすること、みたいなものだと思います。

## 質疑応答 1 利他と芸術、利他と自然

**会場の方 A：**美術作品というのは時間を超えて伝わっていくような、贈与の要素があり、利他やケアにもつながるのかなと思いました。ロシアではソビエト時代にアートがプロパガンダに使われたという文脈も踏まえた上で、近現代のアートと贈与や利他、ケアの関係性について河村さんのご意見をうかがってもいいでしょうか。

**河村：**それはまさに私もよく考えていることで、アートというのはものすごく利己的なんです。「芸術は爆発だ！」と作者が自分の表現したいことを好きなスタイルで表現します。けれども、それを見た人は心を動かされるし、人生や考え方が変わることもある。あるいは作者の意図とは全然違うもの、たとえば「この絵の女性、おばあちゃんに似ている」というふうに自分の経験を重ね合わせて解釈して何かを受け取ったりすることもある。だから、鑑賞者もものすごく利己的なんです。作る側も受け取る側も利己的だけれど、やりとりがあって結果として利他が生じるのがアートだと感じています。

それに対してプロパガンダというのは、考えようによっては芸術作品ではなくて広告と同じなんです。こういうことを宣伝したい、こういうふうに考えてほしいという目的がある。だから、ある意味では利他とは真逆にあるもの。意図があって、見る者をその通りにコントロールするものだと思います。

**近内：**それで言うと、良い作品とか芸術に限らず、文学作品でも音楽でも、何かの計画性とか意図を明らかに超えてしまうエネルギーに触れたときに、僕らはそれを理解したり、あるいは生産的な誤解が起こる。「この絵、私が小さい頃見た夕日と同じだ。なんで同じ絵を描いてくれたんだろう！」偶然なだけでそう思わせる力があるわけです。文化もいる場所も違うけれども、何か普遍的なものを捉えているものというのは、「そういうふうに思わせてやろう」という意図を超えたエネルギーがありますよね。それは描いた人の傷というか、「作らなければならない」とか、「衝動的に何かをやってしまう」ことが、私という器あるいは風景を通してキャンパスに出てきたとき、多くの人の心に訴えるものになるんじゃないでしょうか。

**会場の方 B：**私はライターとして環境保全について取材をしています。先ほど近内さんが環境保全についてお話しされていたと思うんですけども、環境から何かを受け取っているという贈与を考えるからこそ、山とか川に対してケアができるんじゃないかと思いました。人から受け取った贈与とは違って、人ではない環境とか地球とか水とか太陽とか、そういったものから受け取る贈与は認識しづらいんじゃないかというのが課題としてあります。どう

やったら人ではないものから受け取っている贈与を感じ取れるのでしょうか。

**近内：**「移動すること」だと思います。慣れ親しんだ風景じゃないところに行くと、「あの裏山のあの風景って、取るに足らないいつもの風景だと思ったけど、あんな風景他に日本中どこにもないんだ！」と思ったりします、ほかと比べてみて初めてその価値がわかるということです。ずっとそれを見落としていて申し訳ないという思い——知らずに受け取っていた、ずっとあったんだけど気づかなかったことがわかると思います。いろんな場所に行くというのはとても大事だという気がします。

火山といってもいろんな火山の形があるし、火山や温泉、イエローストーン国立公園とか、「この星が生きているな」と感じる風景ってたぶんあると思うんですね。移動してみたときに、それぞれ固有の風景があって、それぞれ固有の呼吸とリズムがあるということに気づくと、いつも自分がいた場所がどれほど特別で固有性のある場所だったのかと愛おしくなると思うんです。いろんな場所を見る。いろんな川を見る。いろんな海を見る。いろんな星空を見上げる。そういう中から、「私がいつもいる風景というのはとても愛おしいものだ」と思えるようになるんじゃないですかね。

**河村：**近内さんが『世界は贈与でできている』の中で、きれいな月や自然を見たら誰かとシェアしたくなる、と書いていましたよね。だから言葉にするというのもいいんじゃないかと思います。月がきれいだったら「あ、きれいだな」と一人でつぶやいてみたり、新緑の頃だったら「緑が鮮やかだな」と声に出して実感してみるのもいいんじゃないかと思いました。

**近内：**まさにかつての人たちはそれを和歌にして詠んだわけですね。白川静先生（漢文学者、1910-2006）が言っていますけど、歌を詠みあげることによって、エネルギーや生命力を取り入れるんだそうです。誰かにシェアするというのは、そういうものを見たときには自然と起こることだと思うんですね。

## あそび、脱主体化としてのシーソー

**河村：**『コモンズ』のテーマは一年目が「利他」、2023年の2月に出た第2号のテーマは「余白」、そして来年の2～3月に出る予定の第3号の特集のキーワードが「あそび」なんです。

**近内：**「あそび」には「余白」的な意味合いもあって第2号とも繋がっているなと思います。日本語の「ここにあそびがある」というのって、ぎゅうぎゅうに繋がっているんじゃないなくて、カパカパするだけの余地がある、という意味がありますよね。なぜ「あそび」というキーワードに決まったんですか？

**河村：**なんとなく、偶然思いついてメンバーで決めました。

**近内：**「そのキーワードでどんな論者が集まるだろう」とか、「どういう対談を盛り込めるだろう」とか、「やってみようか、とりあえず」というのがとても大事だと思うんです。西洋近代では計画性や意図、理性みたいなものがとても良いもので、そうではないものや偶然、アンコントロールラブルなものは劣ったものだという価値観がありま

す。そこに対する意義申し立てがケア論、利他論だと思っています。

**河村：**そうですね。「あそび」というのもいろいろあってすごく矛盾しています。たとえば規範からはみ出すようなものが遊びなんだけれども、ゲームにはルールが付きものです。そういった西洋近代的な価値観では矛盾するもの同士を包含しているのが「あそび」だと思います。

**近内：**むしろ、ルールに徹しないと面白くない場面もありますもんね。

**河村：**遊びって言うと、なんとなく仕事していない時間とか、ぶらぶらしている時間とか、そういう自由な時間という意味もあるけれども、没頭して集中しないと遊べないんですよね。

**近内：**そう、不真面目に遊ぶというのは無理なんですよ。遊びでいちばん重要なのは、「私とあなた」という境界線を破ることだと思っています。哲学者の西村清和著の『遊びの現象学』（勁草書房、1989）という本があって、ブランコとシーソーという遊びの典型が二つ挙げられています。これは比喻ではなくて、ブランコとシーソーが遊びの一つの原型なんだそうです。あと、母親が子どもにする「いないいないばあ」も遊びの原型だそうです。要は、予期したものが裏切られるんじゃないかと思う一方で、安心が与えられる状況です。

中でも僕はシーソーがいちばん面白い概念だなと思っています。一人でシーソーをすることはできません。私の体とあなたの体がある意味一個の存在となっている。シーソーという「場」、あるいはシーソーの真ん中の支柱を拠点に広がって、私とあなたが一個にならないとうまく漕げないし、リズムが合わない。

同期する、シンクロするというのも、利他やケアの一つのキーワードだと思うんですが、遊びというのは同調すればするほど楽しくなる。僕の友人の家に小学校低学年くらいの子がいて、アルプス一万尺をずっとやらされるんですけど、あれ面白いんです。大人は意図と計画性と有用性の世界を生きているので、最初は「これ、何の意味があるの？」と思うわけですよね。でもあれは、いかに私とあなたがシンクロして同じ身体になるか、という身体の延長に関する遊びなんですよ。まさにそこには有用性の彼岸にあるものがあって、「今、ここに私がいる」という感覚を味わえるので、意図していなくても誰かと同調してしまうんです。シーソーというのは交互に行われてとてもフェアですよ。私が7回漕いで、あなたは3回しか漕いでないという状況はない。1回多いことはあるかもしれないけど、交互に起こりますよね。同調しないとうまく漕げないし。

あと西村さんの主張で、私とあなたである必要すらない、というのが面白いんです。結局重しになっていけばいいし、体重が違っていても遊べる。シーソーはフェアだから、体重が重い人がいたら真ん中に寄ればいい。バランスを取る重しとしての役割を自分が担えるならば、別に「私」という固有性はなくてもいい。「私」というものが消えても成立するような、何も求められていない心地よさがあるわけです。重しとしてここにいって、蹴り上げてさえいけば役割が果たせるというとてもフェアなもの。西洋近代的な自己観からすると、同調とシンクロというのは「合わせにいく」ことになってしまいますが、それとは違うんです。

**河村：**シーソーでこっち側も向こう側も主体があってお互いに主張し合っていたら成り立たない、ということですよ。

**近内：**そうそう。だって、そんなに意識しなくても漕げるわけですよ。「私が今、次、漕がなきゃ」というよりも、

自然とできるというのが遊びの面白いところだと思うんです。だから、私とあなたの境界線がなくなる契機が、遊びの場には自然と発生する。それがあそびのすごいところなんだろうな、と思うんですよね。

## 言語ゲーム、ニーズ、「繋がり」「役割」「居場所」

**河村:**英語のプレイ“play”にも、またいろんな意味がありますよね。もともと「劇を演じる」という意味だけけれど、「楽器を演奏する」「ゲームをする」「競技をする」というときも使います。歴史家のヨハン・ホイジンガ(1872-1945)が『ホモ・ルーデンス』の中で考える遊びは、競技や競争がメインになっています。つまり、自分の能力や身体、「こんなにうまく楽器が演奏できる」というパフォーマンスを見せ合って、自分の「卓越」や「優越」を見せる。そういったものはあそび観のひとつではあるんですけど、そのようなホイジンガを引き継ぎながらも批判したのが社会学者のロジェ・カイヨワ(1913-1978)です。

カイヨワはブランコの例をあげて、イリンクスという「めまい」のような身体感覚を伴う種類の遊びがあるんだと言っています。それは競争的な強い主体、自己を見せるという遊びじゃなくて、逆に物と同調することによって主体がなくなるような楽しみ方です。先ほどのシーソーに共通していると思います。

**近内:**そうなんです。ホイジンガだとしても西洋的な発想から遊びをいいものとして人類史の中から取り出そうという意図があるけれど、カイヨワになるとだいぶその辺が批判的になって、かなりアジア的というか、日本の僕らにもわかるところに至っている気がするんですよね。

**河村:**ところでブランコとシーソーの話で思いついたんですけど、遊びというのは、相手がいなくちゃダメなんでしょうか。一人でも遊びになるのでしょうか。

**近内:**ブランコは相手がいらないですよ。

**河村:**そう、いないんですよ。自分がブランコという物と同調する、自分自身に没頭するという遊びだけど、シーソーは重しでいいから相手は一応いなきゃいけない。

**近内:**そうそう。でも何かの対象、かなり広く取った意味の「他者」なるものはあそびに要りますよね。たとえば、一人で詰将棋とかやるけど、将棋の駒と盤面は必要なわけ。つまり、私と私ならざる者との繋がりっていう意味で言うと、人じゃなくてもいいんだけど、他者との同調というのはあると思うんですよね。「ここまでが自分の身体」というが無効になる瞬間というか。

**河村:**それは物が媒介してくれているんですよ。チェスみたいなゲーム盤だったり、シーソーだったりブランコだったり。

**近内:**やはりそこに、圧倒的な物としての手触りがあることは大きい気がしますね。一人でできる遊びか二人が必要なのかというのは気になりますか。

**河村:** 演劇としてのプレイだと、三人以上、つまり見せる人がいないと成り立たないので、人数が重要なのかもしれないという気がしたんです。

**近内:** たしかにドイツ語の「シュピール (spiel)」、哲学者のウィトゲンシュタインの言語ゲームの「ゲーム」も、「演劇」とか「演じる」という意味合いが強いですよ。僕らがイメージするようなゲームというよりは、「演技」「演劇」というニュアンスでウィトゲンシュタインは使っています。

**河村:** それこそ言語ゲームだと、言語を使用する人間が多数いて初めて成立しますよね。

**近内:** そうですね。ウィトゲンシュタインは一人だけの言語ゲームというのは成立しないという私的言語の否定を論じています。あと、ウィトゲンシュタインは単純に寂しがり屋だからかなという印象もあるんですけど、一見すると彼の哲学は「他者性の否定」、すなわち独我論なんだけれども、その裏にでもやっぱり「他者がいないければならない」という感じが僕にはあります。他者なるものを否定しようとするそのウィトゲンシュタインのまなざし自体が、他者の存在をほのめかしつづける、と。私がすべて起点となって始めているものではなくて、「外なるもの」というか、すでにあるものの中にお邪魔している感覚がある気がしますよね。ブランコも、もともと重力と場があって、空気の抵抗があって、その中ではじめてスイングできる。

僕は直観として意図的、計画的にやったものは深く繋がれない、という実感があるんですよね。先ほどの西村清和も『遊びの現象学』の中で「遊び」の対概念は「企て」だと言っています。つまり、「こうしよう」とか「こうなるはずだ」ということを予期して何かをするというのが遊びの反対で、遊びというのはそういうことが無効になるような場所であって、それ自体が目的であるようなものです。たぶん、世の中に企てが多いから僕はそれが嫌なのかもしれないですね。

**河村:** それは一般的なケア論がニーズベースであることと関係あるんじゃないかと思います。医療福祉的なケア論、あるいはフェミニズム的なケア論、政治学者のジョアン・トロント (1952-) が主張するようなケア論だと、正しいニーズを読み取ること、ニーズを細分化して、ニーズの多様性を受け入れることで問題が解決するとされます。でも利他の観点から見るとそれは全く違うような気がします。実際にはケアを受ける当人も、ニーズ、つまり自分がどこに何を求めているのかわかっていない。だから、あらかじめ計画されて、ケアプランみたいなものを立てられても、じっくりこないことが多い。

**近内:** 多様性というのは、予見しえないものに心が開かれているかどうか的大事だと思います。確固たるニーズには本人も気づいていないし、あるいは、ケアされた後に初めてこれがニーズだったんだと気づかされることもあると思います。ニーズは後から遡及的に生成される。

**河村:** ニーズから意図や計画みたいなものが外されると、「ああ、これをやってもらおうとありがたかったんだ」というのがわかって、そこで初めて贈与になるんじゃないですかね。

**近内:** そうですね。大切なものという言い方はするんですけど、僕はやはりニーズという言葉は使わないです。ニーズと言うと、意図の匂いがあるんですよね。求めているとか、もう分かっているとか、確固たるものとして存在し

ている前提がある気がしていて。

河村：遊びとは対極ですね。

近内：「ニーズを満たす」のはサービスで、やはりそこには贈与と交換だと「交換」みたいな匂いがしてしまって、生きた心地はそこからは出てこないんじゃないかな。

阿部彩さんの『弱者の居場所がない社会』（講談社現代新書、2011）という本では社会的な包摂というものはどのようにして可能になるのかということが語られています。社会的包摂、ソーシャルインクルージョンの対概念として、まず社会的排除というものがあったそうです。これは、かつては「貧困」とか「貧困問題」と言われていたものとは違って、労働力や資金がなくなると何がまずいかというと、まず仕事がなくなることによって、人間関係から排除されることです。仕事がなくなると、「最近何やってるの？」「今、ちょっと仕事やめて…」となって人と会いにくくなる。頼ろうと思った身内にも「あんた、最近何やってるの？ 仕事は？」「今やめて…」となって頼りにくくなる。貧困をきっかけに、どんどん社会的な繋がりから排除されていくというメカニズムがあって、この構造が社会的排除という概念です。一方それをどうやって包み込んでケアすることができるかというのが社会的包摂という概念です。

この本で著者の眼差しがすごく面白かったのが、ボランティアとして関わったホームレスの方々のエピソードです。繋がり、役割、居場所というこの三つがいかにも人間の尊厳を保つ上で不可欠なものであるかということを経験者が身をもって語っています。例えば次のような事例があります。あるところにホームレスの方が四人で一緒に生活をしていました。その中の一人、ほぼ寝たきりで介護が必要な、80代の高齢のホームレスの方を残りの三人がリアカーに乗せてケアしていたんですね。「おじいちゃん、おじいちゃん」とか言いながら、下の世話や、体を拭いてあげたり、ご飯を持ってきたり、ということをしていました。「おじいちゃん」って言うんだけど、残りの三人もそんなに若くないんです。

そうやって「おじいちゃん、おじいちゃん」と言って慕っていたんだけど、あるときにその人が亡くなってしまいう。そしたら、それまで一緒に生活をしていたホームレスの方たちがバラバラになってしまったそうなんです。つまり、これは「おじいちゃん」と呼ばれていた人の弱さによって、つまりケアを受ける対象の人がいることによって、その「場」の繋がりが生まれていた。それはおそらく、「おじいちゃん」という場所によって、繋がっていたコミュニティだったから、おじいさんの死によって残りの三人が、バラバラになってしまった。

ほかの事例もあります。いつも駅前でごちゃごちゃになった自転車を整備しているホームレスの方がいたそうです。誰に頼まれたわけでもなく、賃金をもらうわけでもないんだけど、ずっと自転車をきれいに整理し直している。それはたぶん、役割であり居場所だったんだと思うんですね。つまり、ちゃんと社会の役に立っている、あるいは自分がここにいることをちゃんと示していることが重要なんです。

これはやはり、ホモサピエンスの習性というか、僕らの脳に刻まれた本能だと思うんですよ。誰かの役に立つとか、誰かに認めてもらうということがないとまともに生きている心地がしない。それは、金銭的な欲求以上のもので、いかに人間というものは繋がり、役割、居場所という三つの条件が必要なのが見えた気がします。

僕は『弱者の居場所がない社会』読み直して「アナキズムがわかった！」と思ったんですね。著者の研究テーマは、貧困、社会的排除、公的扶助論、社会保障論。つまり、システムをどう設計しようかという、ある意味トップダウンの眼差しによる研究なわけです。つまり、数値やデータをとって、人口動向がこうだからと思考する。あるいは、国会等のレベルで予算、社会保障費がこれくらいということを考えるための研究です。

でも僕が著者の阿部さんが誠実だと思ったのが、ホームレスの方々のエピソードを紹介するときに、「なぜなら私は、社会的排除や包摂とは何ぞやということを本当に肌で感じたのは、書物や研究論文からではなくて、彼らとの関わり合いの中での出来事を通してであるからである」と書くところなんです。「ホームレスのおっちゃんたちは、いわば私の路上の先生である」と。この後にすてきなのが、「正直なところ、客観的なデータを基に議論を展開するスタイルをとっている一研究者としては、このような形で社会的排除や包摂を語ることには大きな迷いがある」というところ。僕からすると「なんで迷うのよ」と思うんだけど、これはたぶん、論文にならないという懸念だと思うんですね。

先ほどの繋がり、役割、居場所を、行政が「あなたの役割はこれです」、「あなたの居場所はこちらでございます」と指定して、公的な支援によって手に入れられるのかという疑問があります。もちろん、子供食堂とか、おてらおやつクラブとか、そこに行政からの資金的支援を入れることはできるんだけど、結局窓口は人なわけですよ。NPOの団体の人とか、おてらおやつクラブの理事の方とか、実際の僧侶の方々とか、私とあなた、というのがそこに絶対あるわけじゃないですか。それはやっぱりトップダウンではできないと思っています。

じゃあ、どうするかっていうと、僕はこの公的な支援を待たずに勝手にやっちゃう。勝手に繋がり、役割、居場所を自分たちで確保する。お互いに与え合い、お互いに作り出し合ってお互いに認め合うというのがアナキズムだと僕は思っています。『弱者の居場所がない社会』を改めて読んで、「あれ、繋がり、役割、居場所の三つって公的に上から与えられるものじゃないか？」と思ったんです。そして、この三つを大事だと思う人たちが一定数増えないと実現しないですよ。上がいくら仕組みを作っても、「それ、何ですか。そんな無駄なお金を使わないでくださいよ」という人がいたら停止してしまう。やはり民意というか、下からの思いで突き上げなきゃいけないくて、「そういうのってないと生きていけないよね」という共通認識を持つのが、おそらく僕が『世界は贈与でできている』のような本を書いたり、こういったお話をしたりする目的なんです。いま気づきました。

この理想を下から作るためには、仲間を増やすしかない。同じ風景を見ている、同じ人間観を持っている人、あるいは「人間の弱さ」という共通のプラットフォームを持つ人を増やさないと、たぶん実現できないんじゃないの？いくら上からシステムを作っても、たぶんディストピア的なものにしかならないような気がしています。

**河村：**存在しているだけで事後的に繋がりができるという共同体が理想的ですよ。それはアナキズムと近いと思います。アナキストで文化人類学者のデヴィット・グレーバー（1961-2020）や彼に影響を受けた人々は、民主主義的なものはヨーロッパ起源ではなくて、実は世界中、歴史を見渡すと至る所にあり、それこそ下からの突き上げで話し合いや協議の場が生まれていったことを主張しています。別に民主主義は西洋の特権じゃない、という話をしています。

ところで、「存在しているだけで価値がある」という発想は、近内さんが批判していた「交換するものがなくなっちゃうと死ぬしかない」というのと真逆だと思うんですね。こういう意外なところでグロイスの思想がヒントになると思います。グロイスは、芸術作品や美術館の制度をずっと論じてきたわけですけども、形ある物も人間も時間が経つと滅びるけれど、美術館に納められたものは、保存修復され、たつぷりとケアを受けて永遠の命を授けられる、そのメカニズムはどうなっているのかということを考えています。さらに言うと、人間は芸術作品である、ということをごここで考えていると思うんです。つまり、人間は芸術作品と同じく、誰でもケアに値する対象であるということを示していると思います。しかもキュレーションとかキュレーターというのは、“cure（治療）”が語源になっている。だからその芸術作品、美術館というのは、ケアともともとつながりがあるという議論をしています。存在するだけで、人間は誰でもケアの対象であるという認識とアナキズムは、すごく親和性があるような気

がしています。

**近内：**僕は『ケアの哲学』の中のフリードリヒ・ニーチェ（1844-1900）の超人の解釈が気になりました。芸術作品である皆さんにはポテンシャルがあるから磨きなさい、自己陶冶せよというものです。それによってセルフケアというのは、傷を癒すだけではなくて、人間として美しい存在を高めることができるというエンパワーメントとして聞こえたんですね。だから、この本には勇気づけられると同時に、結構過酷な人間観でもあったんです。皆さんは芸術作品であるポテンシャルを持っているんだからぼーっとして磨かないのはもったいない。そのためには、自由になりセルフケアを行うのだという、ある意味、ちょっとマッチョな人間観です。

僕はもう少し、「どうしようもないもんね、人間って」という親鸞、一遍、法然のあたりの仏教的な眼差しの方が好きかな。中島岳志さんの『思いがけず利他』（ミシマ社、2021）の中で書かれている立川談志（1936-2011）についての落語論も同じようなものでしょう。落語というのは人間の業を肯定するものであり、どうしようもない自分というものを認めたところから利他が生まれるというのが中島さんの落語の解釈です。人間のどうしようもなさというものが、転じて、生きる力や美しいものになる。

**河村：**弱さが強さに転じることがあるということをグロイスも言っているんですけど、そもそも彼は人間というのは矛盾した存在であると考えています。セルフケアを行って自分の身体をすごく心配するくせに、生命力を持て余してバンジージャンプのようなエクストリーム・スポーツに挑戦したりして、わざと危険に身を晒して生きている実感を得る。生命力を持て余して芸術作品を作り、場合によっては戦争までする。それで、結果的にセルフケアとは真逆の自己破壊に至ることもあるという、ある意味では穏やかではない人間観なんですよ。

## 愛と知性のケア論に向けて

**近内：**最近人間はきれいな存在ではないということをも認めた哲学や思想が相次いで出てきている気がするんですね。グレーバーもそうだし。それでいうと、経済学者の宇沢弘文（1928-2014）も、そういう眼差しで世界を眺めていたんじゃないかなと思います。『自動車の社会的費用』（岩波新書、1974）という本では、車を一台所有しているとどれだけ社会に金銭的な迷惑をかけているか、つまり外部化してしまっている「社会的費用」がどれくらいかかっているのかが論じられています。公害の問題もそうだし、事故を起こすと警察が人員を割くから費用がかかり、税金で賄うわけです。運輸省や野村総研などが出した70年代当時の金額は数万円だったんですけど、宇沢弘文は所有者が車一台あたりに年間でプラス200万円払わないといけないと試算しました。

ある人が事故で死んだら保証額をいくら払わなきゃいけないという人間観を宇沢さんは拒否するんですね。ではどういう計算をしたかという、どうすれば事故が起こらない街が作れるかと考えて、街作りのコストを試算したんです。今ある道路を全部4メートル広げ、途中に街路樹を作り、歩道と車道が絶対に交わらないように高さを変えろというようなことをすると、車1台あたり年間で200万円必要だと言ったんです。

人身事故を起こしたときに、「じゃあお金を払えばいいでしょ。一人いくら？その人が生涯かけて稼いだ賃金？」という発想はホフマン方式という保険費用の計算の基本になっているわけですけど、宇沢さんは人間を交換可能な金銭に置き換えるべきではないと考えたんです。かといって車をやめるのでもなく、車に乗る権利も当然あるから、車があっても安全な街を作るとしたらどれくらいの費用がかかるのかを、車の社会的費用として試算しようと

いう発想で行ったわけです。

『自動車の社会的費用』という本は人間の弱さやどうしようもなさ、あるいは便利だと思うものを前提としながら、いち経済学者としての使命を果たしたケア的な議論だな、知性というのはこういうことだなと僕は思ったんですよね。ケアするって頭使うので愛と知性がないとケアできないと思うんですね。目の前の人を救うのはその人をちゃんと見たり、その人の言葉とか声を聞いたりすればたぶんできるんだけど、まず社会的なレベルでケアをしようとすると、やっぱり愛と知性がないと判断ができないんじゃないかな。愛と知性をどうすれば磨くことができるのか、というのがおそらくケア論の根っこになるのかなと思うんですね。

**河村：**愛と知性に関して、近内さんにすごく聞きたいことがあります。この近内さんの本には小説やポップスの話がたくさん出てきますよね。ノートのコラムを読んで驚いたんですが、ファクトしかなくてファクトチェックをしなくて済むから近内さんは数学が好きだったと書いています。その一方でポップスとか小説の世界というのは、ファクトなんかなくてフィクションしかありません。ファクトとフィクションの両方に関心があってそれらをうまく総合するのは、近内さんの中でどう成り立っているんですか。

**近内：**僕は哲学の反対は文学だと思うんです。結局、哲学ってアプリオリなもの、つまり世界をもう一回やり直したとしても残る構造みたいなものを目指している。イマヌエル・カント（1724-1804）とかはまさに、人間の理性の構造上絶対にこうなるという前提を提示したわけです。哲学というのは、仕組みや枠組み、あるいは経験によらず確かめられるもの、人類史をもう一回やり直したとしても絶対にそうなるだろうという人間の構造みたいなものを取り出そうとするものなんですよ。

その真逆に、まったくの偶然で一回しか起こらないんだけど人間というものの心や魂において何かの普遍性があると信じられるものが、文学や芸術作品にはあると思うんです。それこそ日本の作詞家の松本隆の歌は、まさに普遍性があるような気がしていて、たった一個の出来事ではないんだけど、この物語やナラティブには絶対にユニバーサルなものがある、という感覚があるんですよ。

逆に「データを取ったらそうになりました」というのは、誰でもそのデータを取ったら言えるから、「わざわざ言う必要はない？」と思っちゃうんですよ。それでわかることも大事なんだけど、賞味期限が短いというか、どれくらいもつのかなと不安になっちゃうんですよ。ユニバーサルなもの、何年経ってもよりリーダブル、読めるものを目指したい。それで哲学と、かたやすごくポップな歌の歌詞や、漫画、エンタメ作品の中に僕の信じるものがあるんだと思います。

**河村：**芸術研究の面白さというのはそこですよ。特定の芸術作品はすごく個別で個人的なもの、属人的なものなんだけど、それらの中には何か普遍的なものがあって、その時代のその国の何かが見えたりするときがあるんです。私はそれを見出したいくて芸術研究をしているところがあるんです。芸術という個別から入って、普遍的な枠組みの哲学に至るということを自分はやっているのかなと思います。

**近内：**芸術家や物書きたちが何かをアウトプットして残そうとした時に、どのような傷が背景にあって、この人はこれを描いたのかというのが重要だと思います。たとえば、ベートベンが耳が聞こえなくなった悲壮感や絶望感というのは、自分が今までできていたことが急にできなくなる、あるいは自分にとってとても大切だった聴覚が失われることに対する普遍的な傷の感覚だと思うんです。

あるいは、たとえばゴッホは、物を見ることに対して、私は世界をちゃんと見る事ができているのかというオプセッションと不安があったという話を聞いたことがあります。見えているかどうかという不安に対して、「見えてるんだ！」と思うためにいっぱい描くという姿勢が、僕らに共通する恐れや不安、傷みたいなのを反映している気がしています。作品にはいろいろな形式があり、音楽もあれば絵画もあるし彫刻もあるけども、意外とそれを残した根っこのモチベーションは多くの作品に共通している気がしますね。

**河村：**たぶん傷の原型というのは皆が迎える死だと思うんです。たとえば、結核にかかった芸術家の創作意欲はさまざまいんですよ。それは何か終わりが見えていることによって湧き上がる、それこそ傷を原動力にした創造力が発揮されているのを感じます。

**近内：**まさにメメント・モリというやつですね。小松左京の話も、「死を思え」ということだと思うんですよ。世界が崩壊し、人類は滅亡し、類的に死ぬ。種として死ぬという可能性を含めて日々を生きるところを、いかにエンタメで伝えるかというのが、たぶん小松左京や星新一のやろうとしていたことだと思います。それをエンタメでどうやるかという試みに、愛と倫理と知性があると僕は思います。「こんな怖いことが起こるんだ」と終末論を語るんじゃなくて、「そういうSF作品、面白くないですか？」という形で提供するのって、愛と知性がないとできない。一個メタなレベルから語る物語って面白いんですよ。人々を単に怖がらせるだけでは意味がないというときには知性が要ります。SF作家への憧れというか、大きな物語を作ることによって人々を啓発するというものに対して僕はすごく憧れはあります。宇沢弘文も経済学のアナリストで啓発を成したのはとても素晴らしいと思います。社会における知性というものの使い方がああいうで形あるのだというのを見せてもらった。

**河村：**並外れた想像力によって読み手にも想像と思考を促すような学問や芸術のあり方ですね。

**近内：**やはり僕は受け取り手を信じているんでしょうね。真っ直ぐ伝えればわかってくれるという信頼がある。「ここまで書けばわかるだろう」じゃなくて、「わかってくれるはずだ」と祈りながら書いているような気がしています。「他者の声を聞く」とか、「他者の目を見る」「心を見る」というのはトレーニング可能だとは思っています。系統だったジムとか塾みたいなものはないけども、一人一人が自分の人生を使ってケアを身につけていくのは十分に値することだと思うし、そういう人たちが一定数いないとこの社会は回らないくらい、僕らは弱々しい存在であると思う。その弱さや傷に対する理解というのがおそらくケア論、利他論の根っこに置かれるべきだと思っています。

## 質疑応答 2 身体が存在、セルフケア

**会場の方 C：**自分は「身体性」や「踊り」に関わる活動をしていますが、それは言語ゲームが成り立ちにくい領域なんです。「世界と自分の在り方をどう捉えるか」という行為が「踊り」だと思っていて、それがさっきのプレイの話とすごく通じるな、と思いました。世界と自分をどう捉えるか、自分の存在をどう捉えるかというようなことを考え直さなければいけないことの根本には、西洋の近現代的なものがあるんだろうなという気がしました。すみません、クリアには伝えられないんですけども、その点に関してお話を伺いたいと思います。

**河村：**うまく答えられるかわからないんですけど、ロシア文化の文脈で思い出すのは、アヴァンギャルドの時代に踊りを記譜するという、記号化して踊りに関する楽譜のようなものを作る試みがあるんですね。でもどうでしょう、踊っていて記譜は役に立ちますか？

**会場の方 C：**私が踊っているのはすべて即興なんです。何らかの記譜があったとしても、そこを新たに生まれ直す形で実行しなければ踊りではないんです。記譜に則ってやるとすると、それはパフォーマンスであって、その人がどういう存在として今行為しているかを示すこととは別のものになります。ですからノーテーションによる踊りというものは私の定義からはちょっと外れるなと思います。

**河村：**たぶん、人間というのは、放っておくとノーテーションをしたくなると思うんです。記号にした方がわかりやすいし、記録に残るので、記号化あるいは言語化という方向に向かいがちで、それを押し進めたのが西欧近代だったんだと思います。それに対する疑問から出発して、意味をなさない記号化からそれていくというのは、正しい方向性なんだと思います。

**会場の方 C：**さきほど、近内さんが「ちょっとずれていったところが面白いでしょ」みたいなことをおっしゃったと思うんですけど、決めていたことではないものが現れてしまったときに、世界とその人の存在の関係が立ち現れていると思います。

**近内：**「生命」という言葉で僕がよく言うのはその感覚です。即興性というか、まさにその場で創発されるものです。「予期しない何か」というものが生まれたときに僕らは「ああ、面白いな、時間を共有したな」と思える。今は共通に信じるもの、共通に大切にできるものがあまりなくて、それはたぶん時間と身体ぐらいなんですよ。「一緒に時間を過ごすということ」は、僕らが持っている数少ない共通した大切なものを無駄遣いするから尊いんです。酒飲むなんて、めっちゃ無駄遣いじゃないですか、何の生産性もないし。だけどそれが記憶に残るのは有用性から遠く離れた蕩尽だからなんです。共有している時間や身体がないから、ネットの世界は同じような言葉を使っているように見えて、まったく違う言葉を使っているんだと思うんですよね。

**河村：**そこに入り込んだのがエビデンスとかデータとか、それこそ記号的なものなんでしょうね。ある意味すごくイージーで安直な根拠です。

**近内：**おそらく現代の問題は、ファクトとか数値とかで僕らは救われると思っていたら、救われないということがわかってしまったことにあるんじゃないでしょうか。今、いろいろなケア論、利他論というものもてはやされている。あるいはウェルビーイングやマインドフルネスといったキーワードがあるじゃないですか。ある程度行きすぎた方向から戻ろうとしている気がします。20世紀的に突っ走ってきたもの、近代によって突っ走ってきたものの大元まで一回戻りませんか、というのが、たぶん利他、ケアなのかなっていう気はします。

**会場の方 D：**高尚な質問じゃないんですけど、お二人それぞれにセルフケアみたいなこと、たとえば猫を飼われているとか、趣味で演劇を見るとか、そういうものを一つでもあげていただけたらなと。

**河村：**私、実は趣味がないんです。どうやって今おっしゃった意味でのセルフケアをしているかということ、自分で料理を作ったり、旬のものを食べたり、ちゃんとアイロンをかけた服を着たりとか、睡眠をとるとか、日々の生活をわりと重視しているんです。それはおそらく、近内さんが書いていた「いろいろなものに感謝すること」「贈与を感じる」と繋がっていると思っています。

**近内：**掃除をするとか、アイロンをかけるとか、人間としての生活をいろいろ整えるというのはむしろ余裕があるからそれができているんだと思います。今はいい調子だということモニターできている状況。セルフケアというのは、自分をちゃんとモニターすることで、不調になったときには無茶をしないことです。

ちなみに僕のセルフケアはですね。みっともない大人になることです。みっともないものをさらけ出しても死ななかった、とか、みっともないことをさらしたけど別に嫌われなかったという時に、自分の傷と向き合えると思うんですよね。僕、本当にどうしようもない酒の飲み方とかしてやろうかなと思っていて。それでもみんな離れないんだと思ったら、「しょうがない、俺、こういうやつなんだよ」となれるかなと思って。

「シュッとした私」は計画性と意図の世界のものであって、絶対に無理しているんですよ。みんな変な習性があったり、胸を張れない過去が絶対にあると思うんですよね。「みっともない大人でも死なないよ」というのは、「失敗しても大丈夫だよ、死なないから」というメッセージで、それを次の世代に見せなきゃいけないと思っているんです。「みっともない私でごめんなさい」と言って、「許してください」という感じでやるというのが、いちばん無理をしない、変な超自我の自分を繕わないことになると思います。自分が自分であることに納得するためにはみっともないのをさらけ出すしかないかなと思って、みっともない大人をやっています。それが僕の中のセルフケアです。

**河村：**グロイスのセオリーでいくと、自己破壊と表裏一体のセルフケアですね。

**近内：**うん、そう、結構危ういですよね。傷を焼いて治す、みたいな。でもね、そうじゃないと血が止まらないとかね。ぜひ、皆さんもみっともない大人として、若手たち、若い世代にみっともない大人像を見せてあげてください。若手や子どもたちは安心すると思います。やれる範囲で。

2023年10月5日@隣町珈琲